

洗足学園音楽大学 邦楽 第 12 回定期演奏会

主催：洗足学園音楽大学・大学院

協力：現代邦楽研究所

2022 年 2 月 20 日(日) 17:00 開演

♪♪♪ World Wood Day 2022 Special Concert ♪♪♪

The 12th Annual Concert for Japanese Traditional Instruments

Collaboration: International Wood Culture Society

Start: 2022 February 20 (SUN) 17:00 = Japan time

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

【プログラム】

1 「LITURGIA」 ディエゴ・ルズリアーガ 作曲

指揮：松尾祐孝（教授）

独奏：馮蕊（院2年）

電子オルガン：窪山花（学2年） 内海菜々美（学3年）

打楽器：中田実紅（学3年）

2 「調・下り葉」 根笹派古典本曲

尺八：山口賢治（講師）

3 「津軽三下り」「津軽じょんから節」 津軽三味線独奏

津軽三味線：染谷美里（学4年）

休憩（15分）

4 「ゆき」 地歌

三絃：野澤佐保子（講師）

箏：吉原佐知子（講師）

胡弓：長谷川慎（講師）

5 「呼笛悠遊」（新作初演）松尾祐孝 作曲

笛I：馮蕊

笛II：馬新凱（院1年）

打楽器：富田慎平（講師）

6 「深みどり」 石垣征山 作曲

尺八（笛）I…馮蕊

尺八（笛）II…馬新凱

三絃…吉原佐知子 染谷美里

箏I…中村美優（学3年） 産形典子（卒） 陳卓（院1年）

箏II…野澤佐保子 碓井由希子（現邦研） 大澤陽介（助）

十七絃…川田健太（学2年） 平原愛香（卒）

司会・指揮：松尾祐孝（教授）

【曲解説】

1 「LITURGIA」 ディエゴ・ルズリアーガ 作曲

曲は二つの楽章から構成されています。第I楽章は [Procesional]（行列）は、寺院に向かう厳粛な足取りの行列を象徴したもので、参列者（オーケストラ奏者）による歌（旋律）や非対称なリズムによる祈りが持続する中を、名人芸的技巧生を排した篠笛独奏のメロディーが素朴かつ厳かに歌われます。第II楽章は [Responsorio]（応踊）は、早いテンポの儀式的な舞踏をイメージしたものです。インディアン（原住民）の太鼓のリズムが絶え間なく続き、オーケストラの中で、様々な応答が飛び交い、エクアドルのアンデスの民の伝統芸能を思わせる断片的な旋律が執拗に反復される中、篠笛独奏は必然的に”応答舞”のリーダーとして振る舞いながら輝きます。作曲家の Diego Luzuriaga は南米アンデスの地の民族楽器に、日本の篠笛との類似点を見つけ、特別の愛着を持つ。エクアドルに生まれ、パリやニューヨークでの最先端の教育を受けた作曲家が現代作曲語法を十分に消化した上で、一切の虚飾を排して自己の審美眼に忠実に書き上げた音楽が展開されます。日本の伝統とエクアドルの民族性に見事な架け橋を掛けた作品です。 [松尾祐孝]

2 「調・下り葉」 根笹派古典本曲

この曲は根笹派（別名 錦風流/御家流）と称される流派の曲であり、津軽藩で傳承されていた。9代津軽藩主寧親の命により小納戸役の吉崎八彌好道が、1815年に現在の千葉県松戸市小金にあった虚無僧寺総本山一月寺に入門して尺八を習得し、1818年に帰藩し伝えたものといわれる。根笹派の本曲はこの曲を含めて10曲存在し、さらに裏調子と呼ばれる各曲の転調系の演奏が伝えられている。「コミ吹き」と呼ばれる息を断続的に刻みながら吹き込む吹奏法が根笹派全曲を通して大きな特徴となっている。 [演奏者]

3 「津軽三下り」「津軽じょんから節」 津軽三味線独奏

津軽三味線といえば津軽民謡。津軽民謡といえば「津軽じょんから節」、「津軽よされ節」、「津軽小原節」、「津軽あいや節」、「津軽三下り」の津軽五代民謡として広く親しまれています。本日はその中から「津軽三下り」と「津軽じょんから節」をメドレーとして演奏します。 [演奏者]

4 「ゆき」 地歌

地歌の《雪》は、《残月》の作曲者として有名な峰崎勾当（みねざきこうとう 18世紀終わり頃～19世紀初頭に大阪で活躍）が作曲した「端歌物」（三弦で弾き歌いする曲）とよばれる地歌で、屈指の名曲と言われています。端歌物の作詞は、趣味豊で粋な商家の旦那衆などが携わるなど、上方の社交的な場である遊里やお座敷などで享受されたようです。この地歌《雪》の作詞者、流石庵羽積（りゅうせきあんはずみ）も風流な文人であったそうで、「花も雪も払へば清き袂かな」ではじまる歌詞から、《雪》というタイトルがついたようですが、詞の内容は冬の夜の情景が中心になっていますが、雪を主題としたものではありません。

【歌詞】

花も雪も払へば清き袂かな　ほんに昔の昔のことよ
我が待つ人の我を待ちけん　鴛鴦（おし）の雄鳥に物思ひ羽の
凍る衾（ふすま）に鳴く音もさぞな　さなきだに
心も遠き夜半の鐘　〔合の手〕
聞かも淋しき独り寝の　枕に響く霰の音も
もしやといっそ堰きかねて　落つる涙の氷柱より
辛き命は惜しからねども　恋しき人は罪深く
思はぬ事の悲しさに　捨てた憂き　捨てた浮世の山かづら

美しい桜花や雪を「浮世」とたとえ、それを払い捨てて仏門に入った「ソセキ」という名の大阪南地の元芸妓（歌詞の6行目に「いっそせきかねて」の中に、名前が読み込まれています！）が、昔を述懐する内容です。来ぬ人を待って、夜半の鐘を聞きながら夜を明かすこともあったという歌詞、「心も遠き夜半の鐘」の後に演奏される〔合の手〕と呼ばれる間奏はとても美しい旋律で、本来は鐘の音の描写ですが、〈雪の手〉と称して、他のジャンルでも雪の情景の演出に利用されています。訪れの途絶えた恋人を、霰の音でさえも「もしや」と思って耳をそば立てては涙に暮れていたことを、鐘の音に重ねて回想し、「夜明けともに迷いの夢から覚めた」という意味の「山かづら（＝山の端にかかる暁の雲のこと）」という語で締めくくることが冒頭と呼応しており、享樂の現世と無常の世が詞の中に見事に歌われています。

[日本伝統文化振興財団　じゃぼブログより]

5 「呼笛悠遊」（新作初演）松尾祐孝 作曲

今年度は大学院和楽器専攻に横笛専攻の留学生が2名在籍していることから、横笛奏者2名に（邦楽系）打楽器を加えた作品を定期演奏会に盛り込むことにした。曲は、鼓による”落とし”のリズムに始まり、横笛奏者が能舞台を静々と進む役者のように舞台上を移動しながらやがて左右に離れた定位置に至る〈序〉に始まり、五音連打によるモチーフが団扇太鼓を伴いつつ次第に増殖していきながら次第にリズム感が明確になっていく〈漸増〉を経て、明確な4拍子が確立されて進行する〈祭り幻想〉が輝きを放った後、締太鼓による間奏〈轟〉を経て定常拍節感が無い音楽に回帰する。最後は二人の横笛が呼び交わしがやがて天空の彼方に消えていくようなく呼応〉に収束していく。タイトルは、1999年に国立劇場委嘱作品として作曲して初演された「呼鼓悠遊」（小鼓・大鼓・三味線・十七絃箏・打楽器）に一脈通じる音世界を有していることから、姉妹作という意味もこめて「呼笛悠遊」と命名した。能管・篠笛・小鼓・団扇太鼓・締太鼓・和の金属打楽器のそれぞれの響きの個性と、邦楽・邦楽器の世界が持つ日本特有の時間把握やリズム感を、奏者にも聴き手の皆様にも楽しんでいただきたい作品です。[松尾祐孝]

6 「深みどり」石垣征山 作曲

木々の緑ほど心をなごませ、身体に良いものが他にあるだろうか？自然の深みどりに思いを寄せ、奇をてらうことなく、やすらぎのようなものを表現してみた。1985年6月作曲。

[カセット石垣征山作品集Vol.3より]

※ 本日は尺八パートを笛で演奏します。